

## にぎりしめた手

六年生になるまで、私たちの学年は、大きな問題もなくみんな仲よく楽しい学校生活を送ってきた。私も最高学年になった喜びと、係の仕事や委員会活動の責任の重さを感じながらも、充実した生活を送っている。

しかし、最近ちよつと気になることがある。それは、A子のことである。A子は、いつもおとなしめで、自分の思いや考えを強く出すことがないので、私にはA子が何を考えているのかよくわからない。A子は一人静かに読書をしながら過ごしていることが多い。B子たちのグループの人から無理な仕事を頼まれても、

「うん。」

と、小さくうなずいて黙って仕事をこなしている。給食当番の片付けも、

「私忙しいのでやっておいて。」



掃除の時も、

「雑巾がけとほうき掃除を代わって。」

と、頼まれても断りもせず、少し笑みを浮かべながら黙々と仕事をする。そんなA子のことを私は、友達思いのよい子だなと思っていた。先生も、A子は、熱心に係や当番にはげむ子だと思っていた。でも、それは、A子に対するB子たちの嫌がらせだったのだ。その嫌がらせは、日に日にエスカレートしてきた。

大雨の降ったある日、傘立てのところで、私は偶然びっくりするような光景を目にした。B子たちがA子の傘を地面にたたきつけて壊していたのだ。

「そんなことをしたらA子がかわいそう。やめて。」

と、言いたかったけれど、言えなかった。いじめられているのに、守ってやれない自分が情けなかった。その後、A子はどのようにして帰ったのだろうかと心配した。

B子は、学級ではリーダー的な存在で、勉強もスポーツもよくできる。B子には、頭が上がりず、だれも逆らえない。そのせいか、命令口調で指図をすることが多い。用事を頼まれた時に忙しくて断ったら、

「やってくれないの。」

と、きつい口調で言われ、無視をされたり、廊下や教室でひそひそ話をされたりすることもある。それに、後から、どんな仕返しがかかるとも限らない。それが怖くて、みんなはついB子たちの言いなりになってしまうのである。

それをいいことにB子たちは、気の弱いA子をターゲットにして、無理難題を押しつけるようになってきた。

先日もこんなことがあった。先生が一人一人名前を呼んでテストを返していた時のことである。

「A子さん。」

と名前が呼ばれたので、A子は、テストを受けとり、足早に席へ戻ろうとしていた。その時、B子が目配せをして、B子のグループの一人がA子の足を引っかけた。その拍子にA子はおもいきりみんなの前で転んでしまった。クラスのみんなはその姿を見て、大笑いをした。その瞬間、先生の顔色が変わり、心ない笑い声に、いつになく厳しい声で注意した。B子たちも、はっとした表情でうつむいた。そして、先生はA子に、

「大丈夫か。けがはないか。」

と、声をかけたが、A子は席に座ったまま黙ってうつむいていた。A子のにぎりしめた手はふるえ、テストは涙でくしゃくしゃになっていた。私は、この様子を見て、

(A子の涙は、転んだ時の痛さじゃない。)

と思うと同時に、さまざまな思いが私の頭の中をめぐって、いてもたってもいられなくなった。

家に帰って、部屋で宿題をしても、お風呂に入っても、A子のことが頭からはなれない。にぎりしめた手。

ふるえる手。

次の朝、私の足は職員室に向かっていた。

